



今回は、前回に引き続き、調べる資料の読み方・探し方について説明する。それは、①資料に書かれている内容を正しく読み取る、②資料に書かれていない内容を調べる、③資料から意外性のある情報を発見しプラス α を加味した内容に仕立てる、の3つである。

第四十四話 資料の読み方・探し方（2）

海外を含め環境の大きく異なる他の地域からの情報は、地元の情報の欠けている視点や見落とされていた事実を、気づかせてくれる場合が多い。これらの情報は、情報をバランスよく読み取ることを可能にする。海外からの情報源で、日本の出来事に最も関心を持っている国は、韓国であるといつてよい。アメリカのマスコミは、日本の出来事にあまり関心を持ってない。しかし、韓国のマスコミはスポーツ・芸能から政治・経済まで、日本の出来事に強い関心を持っている。

韓国の大手新聞社の朝鮮日報、東亜日報、中央日報は、日本語で読める。関心のある人は日頃から目を通しておくとよい。日本を批判的に書いている記事や韓国優位の論調も少なくないが、反面教師で、結構気づかされることが多い。

次に、資料に書かれていない内容の調べ方である。ここでは、書かれていない内容とは、「字数や時間等の制約で省略されている内容」、「見逃されている・意図的に書かれなかった事実」、「近い将来生起することが見込まれる出来事」の3つを指す。

内容が省略されている資料の典型的ものは、当たり前のことであるが、テレビニュースである。スポーツの場合、ニュース番組と生中継とで、印象が全く異なる場合が少なくない。試合の経緯そのものよりは、有名選手の活躍だけを報道する紙面をよくみかける。

さて、記述で省略されている部分で、詳しくは知らない・分からない内容をチェックすることである。すなわち、少しでも意味が分からない用語は、辞書・事典で内容をチェックする習慣を身につけることが不可欠である。しかも、異なる複数の辞書・事典でチェックすることである。辞書・事典により、書かれている内容ははずい

ぶん違う。

次に、ウェブ資料で、一番簡単な方法は用語やセンテンスに張りつけられているリンクをチェックし、関連資料を調べることである。また、資料に最後に記載されている関連ニュースや関連記事を、チェックすることである。マスコミのニュースの多くは二次情報であり、もともと情報源が別にある場合が多い。この場合は、元になる情報源にアクセスする必要がある。政府や企業の発表ニュースでは、マスコミが都合のよい部分のみを、報じている場合が少なくない。もちろん、その逆もある。政府や企業が公表していない情報を、マスコミが暴く場合も少なくない。

見逃されている内容については、海外や立場を異にする専門家や組織体からの情報を入手することである。たとえば、学会や医師で見解が分かれている血圧やメタボリックシンドロームについては、それぞれの基準や見解を調べておく必要がある。

次に、意図的に省略されている内容については、相反する立場の人や組織体かの情報を入手することである。たとえば、デモ報道に関しては警察側からだけでなく主催者側の情報も入手することが必要になる。

原発事故などの大事件の報道で、政府や関係団体が、半年後や1年後といった時点で、当時の情報を公開するケースが増えてきている。多くは意図的に隠蔽していたとしか考えられない情報である。大事件の報道については、この点も考慮して読む必要がある。

我々の入手する情報の大半は、一日前、半年前、数年前といった過去に記述されたものである。過去の記事は、現在までに生じた期間の出来事を、たとえ短い時間帯であっても、その空白期間の情報を調べるべきである。実際には難しい場合が少なくない。

原稿を書いている人ならば分かることであるが、原稿の書き上げ直前に、新しい情報が入ってきて、大幅な書き直しを余儀なくされる場合がある。裁判の逆転判決ではないが、たった一つの新情報が、ストーリー全体の書き直しを迫る場合がある。

さて、これから日本に今後起こるかも知れないことを知る上で、しばしば重要な情報源の一つは、韓国である。PM2.0や黄砂といった公害、人間や家畜の感染症は、日本より韓国で先に被害が発生するケースが多いからである。

たとえば、産経ニュース（2014.2.16）は、「韓国で蔓延（まんえん）する鳥インフルエンザに、九州の養鶏関係者の緊張が高まっている。過去2回、韓国で広がった直後に、宮崎県内の養鶏場で発生した悪夢のような前例があるからだ」と報じている。これから話題になるかもしれない新製品や新サービスについては、世界の展示会や見本市をチェックすることである。マスコミの報道だけでなく、ウェッチャーと呼ばれる人や、参加した人のブログ「視察報告」などをチェックするとよい。

新製品、新サービス、新人といった「新」は、これからを意味する。市場の試練を乗り越えて、話題の製品や有名選手になるケースは、ごく少ない。しかし、近い将来に話題になりそうな種は、当初から目をつけて、その動向を追いかけておくことが、他人とは異なる情報発信の鍵を握るのである。（続く）